



生徒同士が考えを伝え合い、ゲームを楽しむための工夫  
 高等学校第2学年 E 球技 ウ ベースボール型「ソフトボール」

1 単元の目標

- 勝敗を競ったりチームや自己の課題を解決したりするなどの多様な楽しさや喜びを味わい、技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解するとともに、作戦や状況に応じた技能で仲間と連携しゲームを展開することができるようにする。状況に応じたバット操作と走塁での攻撃、安定したボール操作と状況に応じた守備などによって攻防をすることができるようにする。 【知識及び技能】
- 生涯にわたって運動を豊かに継続するためのチームや自己の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己やチームの考えたことを他者に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- 球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、合意形成に貢献しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとする、互いに助け合い高め合おうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) ゲームを楽しむための工夫

① 教具の工夫

数多くボールに触ることができるために、不安の原因である男女の体格差や一人一人の体力差の違いで、「ボールに当たるのが怖い」という声に対しては、スポンジ製の柔らかいボールで行うことにした【資料1】。このスポンジ製のボールは素手で捕っても痛くないため、当初はグローブを使わず行った。グローブを使わないため、捕球も難しく、「得意」と感じている男子生徒や経験者もエラーする場面があり、その光景から、技能差だけでなく体格差や体力差に関係なくみんながミス認め合う雰囲気づくりにつながった。



【資料1 スポンジ製のボール】

② ルールの工夫

生徒全員が協力しながら楽しめるように、以下のようなルールを生徒とともに考案しながら実施した。

ア 「攻撃チームがピッチャーをする」

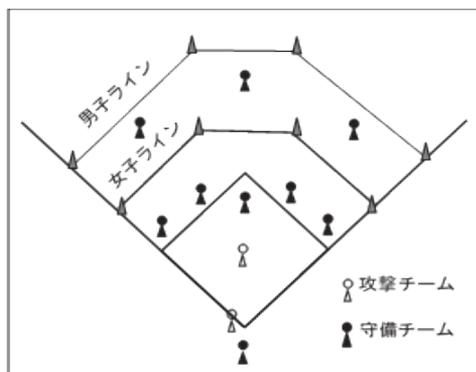
ピッチャーは攻撃チームから出すようにし、それぞれのチームで三振が出ないように打ちやすいボールを投げるようにした【資料2】。



【資料2 同じチームの仲間がピッチャーをする様子】

イ 「男女で分けてホームランゾーンを設定」

ホームランを男女で分けてゾーンを設定し実施した。当初は、男女共通でホームランゾーンを設定していたが、女子から要望があり、女子ゾーンを男子より手前に設定し、男女でゾーンを分けて実施した【資料3】。ただし、ホームランゾーンで捕球したらアウト、捕球し損ねてボールを落としたら、プレイが進行する形で行った。6時間目以降の授業時のゲームでホームラン 24 本（そのうち女子が 3 本）となった。



【資料3 ホームランゾーンを分けたフィールドと守備時の配置例】

ウ 「1回の最大得点数を5～8点とする」

1単位時間において打数が全員に必ず複数回まわるように、1回の攻撃で最大得点数を5～8点とした。このルールで行ううちに、生徒は「3点取ったら満塁にして最後に満塁ホームランを打とう」という作戦を考えるようになり、できるかぎり得点を取ることを目指すようになった。

エ 「守備に『ゲッター』を成功したら1点加点とする」

守備時に効率よくアウトを取り交代するために「ゲッター」の必要性について生徒に教え、「ゲッター」が成功したら守備時でも1点加点する形で行った【資料4】。このルールを導入し、説明して行った結果、走塁時に味方の打球を見て走るようになり、生徒全員のルールの理解度向上にもつながった。実際にゲッターで加点となったケースは全ゲームの中で5回であった。

ゲッター成功（加点）の記録

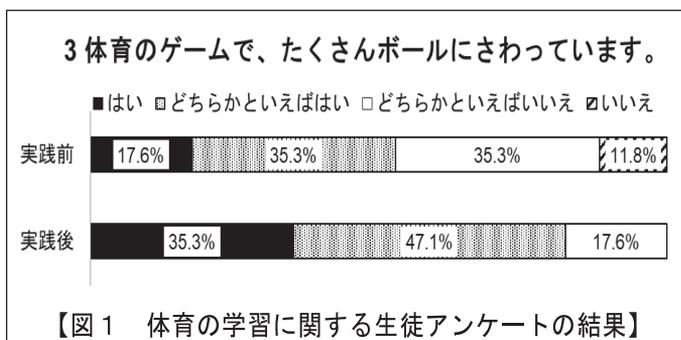
カウント板	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
S ●●	A	2	1	6	4					13
B ●●●	B	1	1	1						3
O ●●●●										

【資料4】得点板とゲッター成功時の記録

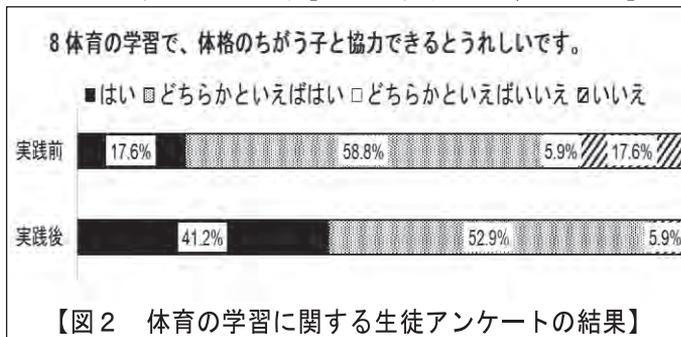
3 成果と課題

(1) 成果

- 「体育の学習に関するアンケート」において、「体育のゲームで、たくさんボールにさわっています」という項目で、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図1】。これは、スポンジ製のボールを使い、ボールに対する不安を軽減できたからだと考える。ボール操作の経験の差に関わらず、生徒が積極的にボールを操作しようとする意識を高める上で有効であった。



- 「体育の学習で、体格のちがう子と協力できるとうれしいです」という項目で、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図2】。男女の体格差も含め、一人一人の技能差や体力差があっても協力して楽しみながら活躍できるゲームを展開したからだと考える。その際、経験者に対して質問したりして、互いに高め合う雰囲気もあり、年度当初のオリエンテーションにおいて、「遠慮はしない。配慮はしよう。」を合言葉として、安心、安全な場を教師、生徒が一緒になって作ったことも有効に働いたと考える。

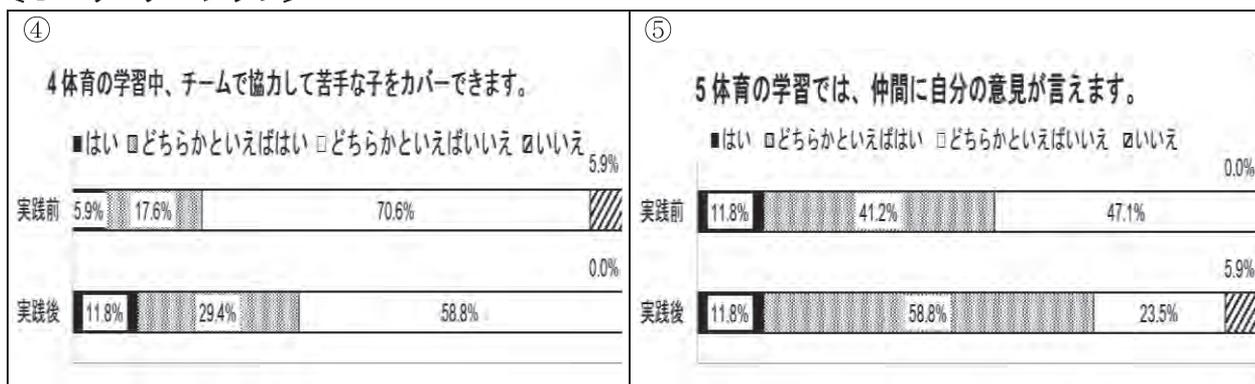


(2) 課題

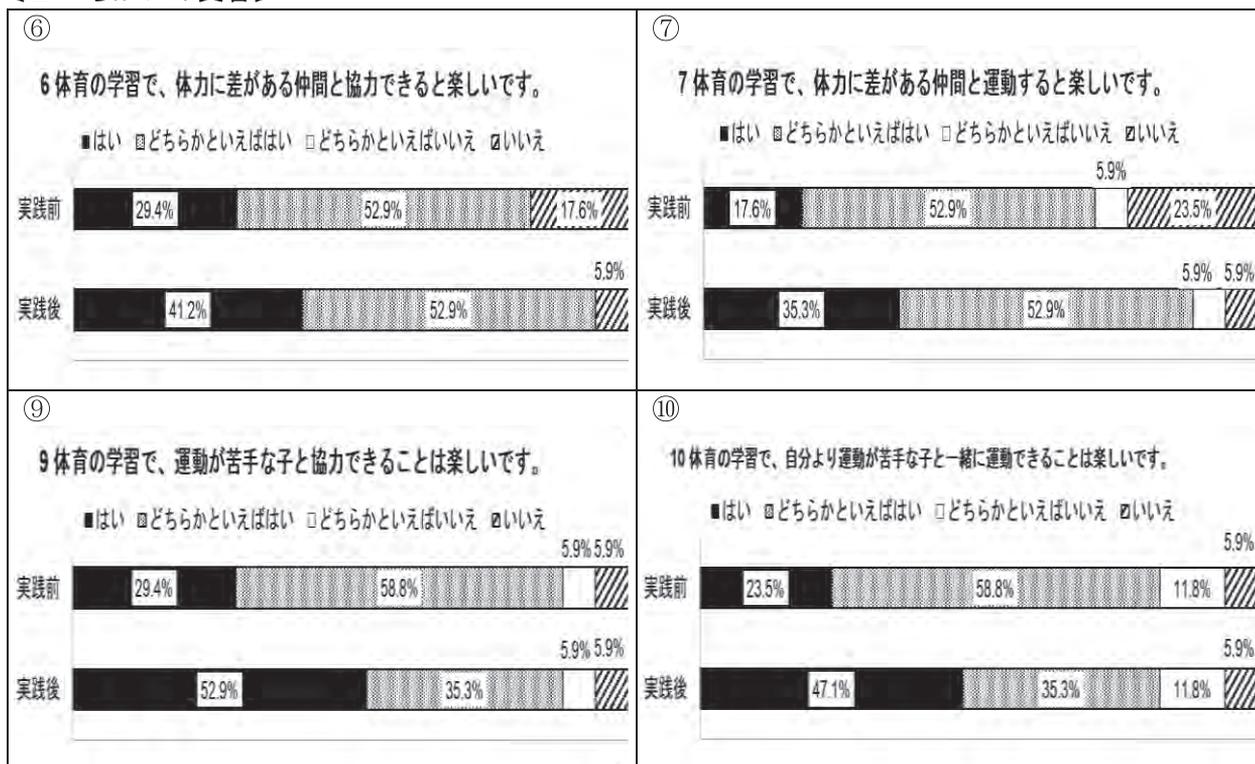
- 球技の特性を楽しむための工夫を行いながら実践を進めたが、球技の醍醐味である「得点する」という感動を多くの生徒に十分に味わわせることができなかった。生徒が、今回の実践で身に付けたベースボール型の動きを、男女、能力差関係なく仲間と連携した動きに発展させることができるように、次年度の学習に生かしていきたい。

【児童生徒の変容】

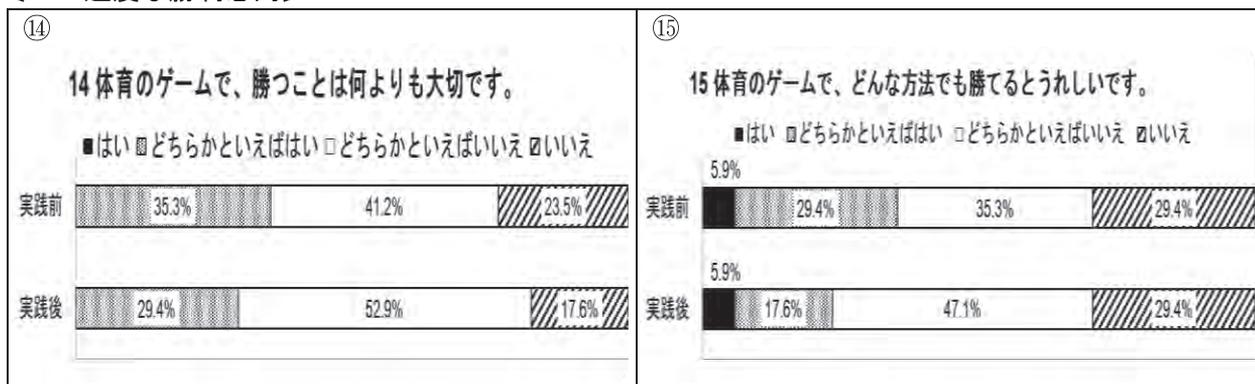
〔Ⅰ リーダーシップ〕



〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔Ⅴ 過度な勝利志向〕



【授業実践協力者の声】

授業では、体育は全員で体を動かすことが当たり前ということを伝えていきます。みんなが満足できる、真剣に取り組むことができるルールは何かを生徒と一緒に考えることができました。

